

森林の少年(2)

D・H・ロレンス／M・L・スキナー著
山田晶子 訳

思いは語る。スワロー氏は、長いやせた赤ら顔をして、大きな鼻とあいまいな目をした紳士であると分かったのだが、身を乗り出して開いた窓にキセルのラオを突き出していた。

「砂地を通っているあの美しい道路を見てごらん下さい。あの道路はパースまで続いていて、人道へ繋がりはるかか田園まで伸びています。人体の動脈のように、あらゆる方向へ分かれています。囚人の労働力を使って工兵と鉦夫によって作られたものです。そう、囚人の労働。今渡っている橋もそうです。」

ジャックは道路を見たが、満々と滑らかな、この世のものならぬ美しい青い水をたたえた河にもっと魅了された。黒いスワロンを探したが、一羽も見つけられなかった。

「そつですとも！そつですとも！生まれ故郷では鳥はもっと野性的ですな。もう少し上流にいますよ。」

と、スワン氏は言った。

河の彼方には再び砂地が広がっていた。あらゆる方向に広がっている白い砂。

「カーペンターが泣いたのはここだったに違いない——」
ジャックは、窓の外に顔を突き出したとき、なおも嘆れていたが、予期せぬ若い声で言った。

三人の紳士は、ジョージ氏が頬を膨らませて再び喋り出すまで、受動的に狼狽したまま黙っていた。

「あんなに大量の砂なんかを見るなんて。」
それから彼は鼻を鳴らしてかんだ。

ベル氏は直ちに西オーストラリアの冗談を感じ取った。それをジャックは母から受け継いでいた。

「歩いてみてごらん！」彼は手で膝をたたきながら叫んだ。

「五分で終だ。無駄なこと！無駄なこと！眼識がある紳士だね、君は。この植民地で私らが必要としている人だよ——眼識がある男というのは。眼識がない男が五十年前に私らをここへ置き去りにしたんだ。空っぽの、空っぽの砂。どういう結果になると思うかね。動けなくなり、飽きてきて、縛られて、砂に窒息させられてしまう。そうなんだよ。」

「全然そうじゃないよ。」

とスワロー氏が言った。

「悲しみ、罪、砂。」

と、ベル氏が繰り返した。

ジャックは、彼等の気ままで安逸で自信に満ちた生き方に困惑したが、愉快であった。これはなおも少し儀式めいていた。ワイシャツ姿で、しかも少しだけ儀式的。彼等の奇妙なコックニー発音と、正確な文法と僅かな勿体ぶりもしかりであった。彼等は決して「あなた」と言わず、ただ「君」とのみ言った。——「それが君のやり方だ。」——そして彼等の引き延ばすほとんど冷笑的な態度は、ワイシャツ姿の親しみやすさとは対照的であった。みすばらしい服装と話し掛ける時に頷く愉快的態度とは。

「その通り、その通り。グラントさん。」

と、ベル氏は続けた。ジャックは、「さん」付けて呼ばれたくない、と思っていた。

——「眼識のない男が、イギリス内閣の政治家連中が、このよ

うな広大な場所に投資をする気にさせた。この同じ人間は、自分を探り人の土地の王と考えた。そして数人の愚かな従者と共にやって来た。これらの愚かな従者たちは、三ポンドの価値しかない全ての品物一品につき、四十エーカーの土地を与えられた——」

「砂地の」

と、ジョージ氏が答えた。

「——そして見込がある百万エーカーの土地も」

と、ベル氏は動じないで答えた。

「だから愚かな従者たちは、たいていが良家の若者だったが、土地を持ちたがったんだ——」

「二人の男につき五人の女がいるグループでね——プ——！」

と、ジョージ氏は鼻を鳴らした。

「——やって来たんだ。彼等は、土地がタバコや、綿や、砂糖や、亜麻の栽培に非常に適していると教えられた——そして牛を育てれば陛下の船に塩肉を供給できるし——そして馬を育てればインドの軍隊に役立つ、と言われたんだ——。」

「カンガルーやワラビーと一緒に。」

「——つまり騎兵隊のことさ。だから彼等はやって来て、砂に上陸したんだ——。」

「そして頭をそこに突っ込むように言われた。だから死が彼等を凝視していることが分らなかったんだ。」

「——彼等が持ってきた品物と一緒に。」

「ハーブがあった!」

と、ジョージ氏が叫んだ。

「母はハーブとペーズリー織のショールを持ってきた。それらと交換して五百エーカーの土地を得たんだ——ハーブの見積もり価格は二十ギニだったんだがね——彼女はそれを持って真直ぐに天国へ入ったほうが良かったな。」

「その通りですよ!」

ベル氏が無頓着にあいづちを打った。

「違いますよ! 私が生まれて来なかったほうが良かったと言うのかね?」

ジョージ氏が異議を立てた。

ベル氏は口を噤んで微笑み、また続けた。

「グラントさん、これらの紳士淑女は荷物を持ったまま砂に飛び込んだんだ。そうとも、僅かの牛や羊や馬がいた。だが他に何があったと言うのかね? ハーブとペイズリー柄のショール。マントルピースの上に置くための、装飾用ワックス製果物を入れたガラスのケース。家庭用聖書と家庭用馬車ですよ、君。その馬車と交換で、彼は一千エーカーも土地を手に入れたさ。そして彼等がそこに上陸した昔日には馬車は役に立たずに終わった、何故かと言えば、馬車が走れる道はこれっぽっちもなかったからなんだ。馬車で行ける目的地もなかったんだ。彼等は車輪をはずしてそこへほったらかしにした。私自身もそれに乗って見たんだがね。」

「自分の馬車に乗った。」

と、ジョージ氏が微笑んで言った。

「私の母親は牧師の娘だった。私自身はブツシユの小屋で生まれたんだ。そして母親は間もなく死んだ……。」

「無念のために! 無念さで!」

ジョージ氏が呟いた。

「私たちはあの頃の苦しみにヴェールを引こう——」

「そうそう、しかし私たちは儲けもしたよな! 儲けたぜ!」

スワロー氏が気楽そうに口を挟んだ。

「何をブツブツ言っているんだね? 儲けたじゃないか。ベル、君は金で一杯なのにブツブツ不平を言っているのかね? 誰だっ て君がニシリングのローンを望むと思ったよ。」

「バピロンの河の畔に私たちは腰を下ろしていた——」

ジョージ氏が言った。

「そうだったっけ。いいや、違うね。私たちはスワン河を上って行った。それが父親がしたことなんだ。遅しいイギリス人のヨーマンだったよ、グラントさん。」

「どこで舟を手に入れたんだね。」

と、ベル氏が訊いた。

「古い舟さ。——私はタータンチェックの服にくるまれた赤子だった。母親の膝に抱かれていたことを今日まで覚えていた。——父親は舟を浮浪者から手に入れたんだ。こわれてしまっていた。そして海を渡るのに適していなかった。だが彼は

河を渡れるように修理したんだ。そして彼等はスワン河を上って行った——父親と二、三人の年季奉公人は。私たちは上スワン溪谷に上陸した。覚えているのはキャンプファイアだよ、君。」

「たいていの物よりは良いね。」

と、ジョージ氏が口を挟んだ。

私たちは雑木林を切り開いた。石を拾い上げて積み上げた。穀物や小麦を植えた——」

「タータンチェックを着た赤ん坊は鋤をあやつつた。」

「うん、大きくなってからね。——羊は繁殖したし、土地は実つたし、一族は栄えたよ——」

「ミルクと蜂蜜を食して——」

「もうやめろ、スワロー！」

と、ベル氏が叫んだ。

「君の父親は四十年間とちよつと、洪水や干ばつと格闘したじやないか。一八六二年の洪水は彼の心を引き裂いたし、七二年の洪水は君を打ちのめした。そして今は八二年さ。だからあんまり大口をたたくな。」

「打ちのめしたって！いつ私が打ちのめされたのかね？」

と、スワロー氏が叫んだ。

「羊は百十パーセントになつたし——知っていると思うが、双子や三つ子を産んだものも少しいた。牛は九十パーセント、馬は五十パーセント。それら全部を売るマーケットがある。」

「ベストが百万パーセントだ。国がまさに自立しようとしていた時に、サビが一万四千エーカーの小麦畑を破壊した。野犬が百三十五パーセント殖えた、そして同数の羊を殺す。牛は逃げて行つてもう姿が見えない。馬は、捕まえて、馴らしたり、訓練したり、インドへ送る前に目が飛び出そうな程金がかかる——」

「蛾とサビか！蛾とサビ！」

ジョージ氏がぼんやりと呟いた。

三

ジャックは、若者が抱く居心地の悪い考えに捕らわれて、じつと座つて言葉の洪水が荒れ狂うに任せた。とうとうジョージ氏が彼に話し掛けたので、ハツとした。

「ところでつと、君、なぜここへ送られてきたのかね？」

これは「囚人という先祖」を言い含んだ植民地のささいな冗談であった。しかし不運にもその言葉は、またジャックにも打撃を与えた。なぜなら、彼は余りにも故郷では退屈していて、大人しくしなかつたために、当地へ送られてきたのだつたからである。「低俗な」仲間と付き合い過ぎたためであった。きたらしい場所に入入りし過ぎた。社会のお上品な要求には無関心であり過ぎた。それで彼等は蕾に潜む虫を恐れたのであった。そこで彼等は、対しよ点で花が開くようにと、当地、地球の反対側へ蕾を送り込んだのであった。

だがジャックは詳細を暴露するつもりはなかった。

「ここで暮らしていくためです——」

彼は答えた。それは本当であった。——だが父親は手紙に何と書いていたのか？彼は顔を赤らめて怒った表情をした。濃紺の目は非常に黒くなった。

「学校を追放されたんです。」

彼は静かに付け加えた。

「農業大学からここへ送られたんです。これが卒業年よりも一年早く大学を出た理由です。だが僕は——ここで生きていくためにやってきたんだ——とにかく。」

彼は口ごもった。彼は大人を憎悪していた。判決を下す大人というものを決定的に憎悪していた。

ジョージ氏はすまなさそうに片手を上げた。

「何も言わないで！何も言わないで！君の父上は何も言っていないよ。——もし話したいなら、仲良くなった時に話してくれたい。だが無理に話さなくていいんだよ。——ばかな冗談を言つて悪かった。忘れておくれ。——君、父上が私に書いてくれたように、この土地で生きていくために来たんだ。——私は君が生まれるずっと前から、父上を知っていた。だけど母上の方をもっとよく知っていたよ。」

「私もそうだよ。」

と、スワロー氏が口を挟んだ。

「そして軍人が彼女を西オーストラリアから連れ去って行っ

た日を悲しんだ。ケイティ・リードはここで咲いた花だった。そして彼女に匹敵するイングランドのバラを見たことがなかった。」

ジャックは今やこの上なく深い色で顔を赤らめた。

「だが、もし君が僕たちに話せる悪ふざけをやったのなら——いいとも、かまわないよ。私達は、学校教育を受けるためにイングランドへ船で送られたことを忘れてはいない。」

と、ジョージ氏がざるざるに言った。

「ああ、そう！」

と、ジャックは答えた。彼は何を行つたらよいのか分らない時はいつも「ああ、そう！」と答えたのだった。

「君は農業大学にいた、と言うのだね？なるほど！——いや、私はそこで最年少生だったよ。馬の世話係りで、馬具の掃除係りだった。それでおしまいさ。ああ、なるほど！——以前そこで大騒ぎがあつたことを知っているだろう。小僧っ子たちは委員会に不平を言った。何故かって、私たちはチーズつきパンをもらったが、バターも夕食も出されなかつたんだからさ。ココアにはミルクがついていなかったしね。しかも私たちは小僧っ子に過ぎなかつた。私たちは——ああ、そうだ！——たいていは大人だった、本当は——一八歳——一九歳——二〇歳。二三人もがそうだったな。私は最年少だったよ。気にしなかつた。だが男たちは違つていた。インド内乱、或は海軍の試験に失敗した者がたくさんいた。確かにやつらはでかい、腹を空かした男

たちだった——」

「うん、そうだったな。」

ジョージ氏が同意して答えた。

「そう、大騒ぎがあった。彼等は僕を肩車に載せて、僕は校長室の窓を叩き割ったんだ。」

それらの窓を割ったことをいかに楽しんでたかを、ジャックの顔を見れば分かったであろう。

「何で割ったんだね？」

と、ジョージ氏が訊ねた。

「体育で使う木の棒で。」

「財産をやりたい放題壊したんだね。ははーん！」

「校長は怖がった。だが彼は悪魔を呼び出して、町へ行って委員会に話すと言った。それで、直ぐに警官に命じて九時の電車に乗せた。それで、僕は警官を正面玄関へ連れて行かねばならなかった——」

ここでジャックは黙った。もうこれ以上話したくなかったのだ。

「それで——」

と、ジョージ氏が言った。

「そこで、僕が馬の頭から退いて脇へ行った時、校長は綱を引っ張った。それで馬が逃げた。」

「その男は馬を押さえることが出来なかったのかね。そんな立場にいる男は馬の扱い方を知っているはずだ。」

ジャックは、彼等の顔をしげしげと見た。彼自身の顔にはあの、人を食うような無邪気な表情があった。それは生死をもともしない大胆さを隠していた。

「綱は轡に留められていなかったんですよ。どんな人間だつてあの馬をあやつることは出来なかった。」

と、彼は静かに答えた。

悪戯つばさど混ざった面白がる表情が、ジョージ氏の顔に広がった。だが彼は真の植民者であった。彼は、権力者に刃向かう物語を結末まで聞かなければならなかった。

「それで、ことの終はどうなったんだね？」

と、彼は訊ねた。

「気の毒に、彼はその事故で脚を折ったんです。」

と、ジャックは答えた。

三人のオーストラリア人は、どつと笑った。一つには、ジャックが「気の毒に」と言った時、彼が本当にそう思っていたためであった。彼は、本当に脚を怪我した男を哀れに思っていたのだ。だが怪我をした校長を気の毒とは思っていない。校長が地面に投げ出されるや否や、ジャックは、唯怪我をした男を見ていただけで、彼の役職のことは忘れていた。そして彼の心は、怪我をした男のために痛んでいた。

しかしもしもいたずらながらも一度行われる機会があれば、彼は多分やったであろう。彼は後悔していなかった。——しかしながら、感情は真に感じていた。そのことが彼を滑稽に見せてい

た。

「驚くなあ！」

と、ジョージ氏は新たな不安を交えて頭を横に振りながら言った。

「それでここへ送られたんだね。」

と、ベル氏が言った。

「それで君のお父上は、君をここへ船で送るのが良いと考えたんだね。え？最上のことだとね？あの場所では君は何も学ばなかっただろうと思うよ。」

「いやーたくさん学んだよ。」

「いつ蒔いていつ刈るか。そして付着しているラテン語のモットーを？」

「いや、そうじゃないんです。獣医の仕事を学んだんです。」

「獣医の？」

「ええ、そうです。馬丁の長は、紳士の獣医でした。ですが、彼は体が弱かったんです。そこで彼は元気な時に僕に獣医の仕事を教えてくれました。そして彼が発作に襲われた時、僕は親切のお返しに、手押し車を押してパプまで行き、彼を乗せて家まで送りました。藁の下に彼を乗せて。」

「親切な学校だったな！まあ！」

と、ジョージ氏は鼻を鳴らした。

「うん、それはカリキュラムにはなかったよ。母は言っても

んだ。探せば天上にはならず者がいるよ、と。」

「それで君は探し続けているのかね、え？——そうだね、私が君なら、探さないだろうね。特にこの国では探さないね。私が君だったら、世間の酔っ払いの馬丁のためになんか獣医をするのはごめんだね。窓を壊しもしないし、手綱を留めないままにしておかないだろうし。理由を教えてやろうかね。それは習慣になるからだよ。君はならず者とやっつけていく習慣を身につける、それで駄目にされる。なぜならこの国にはうんと大勢のならず者がいるし、めっちゃやたらとろくでなしがいるんだよ。やつらは見るだけで十分だ。いやらしい、墮落したやつらさ。——ここはものすごく大きな国なんだ。もしそうしたければ、正直な人間は、見えない背後の世界へ好きなように進んで行けるのさ。だが、ねじれたり落伍し始めたら最後、国は彼を叩き潰す。国は叩き潰す。彼はもはや神にも人間にも相応しくはないのだ。——君、この国に用心なさいよ。悪ふざけは止めなさいよ。イギリスで、化石のような年寄りに悪戯するのは結構だ。皆が二、三の悪戯を望んでいるからね。だが、ここでは——絶対駄目だ！君の力と機知を、ブツシュと戦うために取っておきなさい。ここはものすごく大きな国なんだ。そして男を必要としているんだ。ならず者じゃない、男を、だ。とてつもなく大きな国なんだ。男を必要としているんだ。自分の生き方をすればよい。したいことをやるがよい。住居を定めなさい。羊牧場を経営したらよい。材木を切り出すがよい。また金

を見つけるがよい。だが何をやるにせよ、男としての運命に従って行動するのだよ。真面目に生きなさい。他の人間のことは気にかけなくてもよいさ。だが真面目に生きなさい。」

ジャックは、窓の外を凝視して、輝く稜線まであらゆる方向に伸び広がった何マイルもの鈍色の暗緑色を見ていた。母親の声が聞こえてきた。

「自分自身の内部の声を聞きなさい。世間の意見には耳を貸さないで。あなたの内部に正しい光が射すときが分ります。それがあなたの内部の神の精神です。」

だがこの「正しい光」というものが彼を少し困惑させた。校長の窓ガラスを割ったり、酔っぱらった馬丁と一緒に獣医をしていた時、それを感じたと思いがちであった。だが、その言葉は彼を魅了した。「あなたの内部の正しい光——あなたの内部の神の精神。」

彼はじつと座っていた。一方オーストラリア人は植民について話し続けた。——「忍耐力があるかね？我々強いかね？そうかね？——この国は君が必要だし、君の子孫が、君の足跡が必要だ。君の関心と希望と人生とが。君の息子についても、孫についても同じさ。君が居着いても去っても気にしないさ。国は問題ないさ。いつまでも待つき。急ぐことはない。何百万人も人間を必要としているから。国には無限に待った。これからも待てるさ。ただ男が必要なんだ——分るかい？もしやつらが落伍者やろくでなしなら、国は食べてしまうさ。国は本物の男

を待っているんだ——骨までイギリス人を——」

「ジョージ、彼はまだ子供だよ。男のこと——骨までイギリス人のことは、少し黙っていたら。」

「いいんだよ、ベル。——私は一八三一年からここにいるんだ。喋らせてくれ。古い帆船『ロッキンガム』号に乗ってここへやって来たんだ——岸辺で難破した——町にロッキンガムという名前を残した以外は何も残さなかった。魚釣りには良い場所だ。——一八四一年にロンドンの学校へ送られた——別の帆船で。そのときは難破しなかった。植民地の産物を積み込んだ『シエパード』号だった。——最初の蒸気船は一八四五年まで来なかった——素晴らしい進歩を見せた『ドライバー』号だった。——私が植民地へ戻って来た時乗ってきたんだ。素晴らしき進歩だったよ。書記として戻って来たんだ。——二、三の教会とミル・ストリート棧橋と、グラマースクールが開設されていた。人道が作られて、たくさんの開拓がなされていた。エア氏はアデレードから逃げた——みんな、私の時代に起きたことなんだ、みんな私の時代に——」

四

ジャックはこの話が永遠に続くだろうと思っていた。ポーターとしてきた。有り難いことに、汽車は、木製のプラットホームの脇でグイッと止まった。このプラットホームは杭垣によって砂地と区別されていた。ポーターが一人、手を口に当てて、た

だ様子を見るためだけに「バー」と叫んだ——なぜなら彼は他では鳴らすことはなかったからだ。皆はいっせいに汽車から飛び出した。町は砂地に建っていた。砂に吹き捲くられる木のプラットホームがある木製の家々。

そこでジョージ氏はじっとしていた。——「そうだ、ベル。塩辛い砂が成熟するのを待つんだな。我々の二、三人が死ぬのを待つんだな——そして衰退するのを！成熟——肥料——それが求められているものなんだ。砂地の死体。砂利の中の人骨。それがこの国を成熟させるものなんだ。あんたがそこに埋葬する人々。ただ良い肥料。死人は地面の種のような。ベル、あんたと私のようなもう二、三人が埋められたらな——」

解 説

ロレンス(一八八五—一九三〇)は、イタリア滞在から動きたいという欲求にかられて、一九二二年にセイロンへ渡航したが、芸術のためのインスピレーションを得られず、六週間の滞在後、オーストラリアへ向かった。それは一九二二年五月のことで彼は西オーストラリアのパースに到着した。

モリー・スキナー(一八七六—一九五五)は、パースで生まれたが、父親が軍人であったため幼少時にイングランドに連れていかれ、一九〇〇年に故郷へ戻った。イングランドでは看護婦の勉強をしていた。第一次世界対戦中は、インドとビルマへ

ヴォランティアで看護婦として従軍した。此の頃から小説を書き始め、『ある救急看護奉仕隊員の書簡』、『五番目の雀』、『黒いスワン』等を書いたけれども売れ行きは余りよくなかった。

しかしロレンスは彼女の小説に関心を持って、助言を与えた。そして彼女が『エリスの家』という題名をつけた小説を、ロレンスと共同で執筆するという結果に繋がったのである。これが『森林の少年』が書かれた簡単ないきさつである。『森林の少年』は、一九二三年一月一日に完成され、一九二四年一月九日頃最後の章が新たに付け加えられ、一九二四年八月にイングランドで出版された。

ロレンスがこれまで書いてきた「光と闇」の交錯の主題がこの小説にも濃厚に表れている。